

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401, 044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第103号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！
 「川崎の文化財」

橘樹官衙遺跡群 [たちばなかんがいせきぐん] (3)

===橘樹郡衙正倉院で発見された建物②===

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 栗田 一生

今回は橘樹郡衙跡で発見された大壁建物から、橘樹郡が渡来系氏族の影響を受けて発展したこと、そこには飛鳥部吉志氏の存在が想定されること等、記録にない橘樹郡の歴史を推測してみました。今回は、橘樹郡衙正倉院で発見された建物から、正倉院の終焉についてお話したいと思います。

橘樹郡衙正倉院の中で建てられた建物ですが、これまでの調査の結果、前回お話した大壁建物が建てられたⅠ期(7世紀後葉)、次に建物主軸方位が西に傾いているⅡ期(7世紀後葉～8世紀初頭)、建物主軸方位がほぼ真北になり、周囲に溝が巡らされ最も正倉院が整備されたⅢ期(8世紀前葉～後葉)、正倉院の規模が縮小し、終焉に向かうⅣ期(9世紀前葉～中葉)という4つの時期に分けることができます(図1)。

郡衙の正倉院については、全国で実施された調査の成果から、律令体制の開始に伴い正倉院が設置され、その後9世紀頃になると、それまでの掘立柱建物から礎石建物へ建替えられ、10世紀まで存続する例が多いことが分かっています。橘樹郡衙正倉院の場合、確認されている建物は全て掘立柱建物で礎石建物は発見されてい

ません。また、存続時期も遅くて9世紀中葉頃と、一般的な正倉院よりも1世紀程度早く終焉を迎えています。なぜ早く終焉を迎えてしまったのか？その理由については、まだ良く分かっていません。しかし、古代の歴史的背景やこれまでの調査成果等から、ここでは橘樹郡衙正倉院終焉について2つの考えをお話したいと思います。

1つ目は、正倉への火災防止対策のために移転したのではという説です。全国各地では、8世紀中葉以降に神火(じんか)と呼ばれた正倉火災が多発していたことが『続日本紀』等の記録から分かっています。国はその対策として791(延暦10)年に、「新しく倉庫を造る際はそれぞれ10丈(約30m)以上離して造営せよ」との命令を出しています。また、795(延暦14)年には、郷ごとに正倉の別院を置くことやこれまで保管していた不動穀を使い果たしたら新しい正倉院に移転すること等の命令も出しています。しかし、橘樹郡衙正倉院は、立地する丘陵の幅が狭く、建物が建てられる平坦面が少ないことから、国の命令どおり正倉を新しく造ることができなかつたと思われます。そこで、橘樹郡では、795(延暦14)年の命令に従い、正倉の別院を設けて正倉を新しく造ることにしたため、正倉院にはそれまでのような規模の正倉は造られなくなり、急速に衰退していったのではないかと考えます。ただし、橘樹郡衙以外の郡衙正倉院では8世紀末以降も従来の正倉の姿を維持している例も多いので、この解釈では課題も多く残ります。

2つ目は、西側に隣接して造営された古代影向寺との関係が考えられます。古代影向寺は、橘樹郡衙正倉院の様相とは異なり、10世紀初頭まで武蔵国府の協力を得て寺院を維持していたことが出土した瓦等から明らかになっています。古代影向寺は、8世紀中葉の国分寺創建後、国による国分寺を中心とした新たな仏教統制に組み込まれ、武蔵国内における国家の仏教政策を担う寺院の1つへと位置づけが変わり、準官寺的な寺格が与えられた可能性が推測されています。こうした古代影向寺の位置づけが変化する中で、寺院に係わる施設を設置する必要が生じたと考えられますが、立地する丘陵平坦面は狭く、寺院と郡衙を並立することは困難な状況であったため、郡衙の諸施設を他所に移転させたのではないかと考えます。

いずれにしても、上記の説はあくまでも推論の域を出ません。この理由が明らかになる日が来るのが、待ち遠しいですね。(つづく)

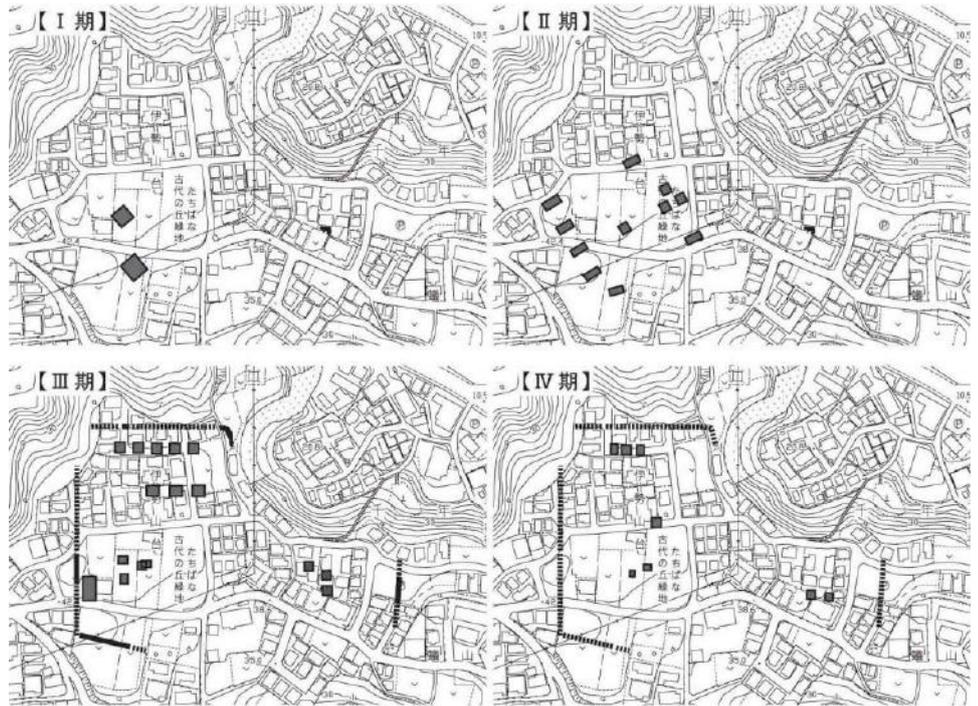


図1 橘樹郡衙正倉院の変遷

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第73話

北条氏関東支配 (6)～北条氏滅亡

小島 一也 (遺稿)

永禄二年小田原衆役帳ができ、伊豆・相模・武蔵の北条氏の治世は徳政と言われたようです。だが戦国の世のこと、それは長く続くものではありませんでした。最初に陰りを見せたのは市内の平間、木月、長尾、登戸と広範囲に所領を持つ太田氏でその棟梁太田康資(江戸衆)は永禄七年(1564)北条氏に背き、氏政が追放した古川公方を擁する下総の里見義弘の軍に加わりますが、その背後には元関東管領上杉家の存在があったのです。

この越後の上杉景虎(謙信)が永禄年間関東進出を決め小田原城を襲っています。これは前関東管領上杉憲政が管領職を景虎に譲った披露をするもので、上杉軍は上野から武蔵、相模国に侵入しますが北条軍は小田原に籠城して相手にせず、謙信は敵の中を鎌倉八幡宮に詣で管領就任を報告、越後に戻ったとの逸話がありますので、前記太田氏の離反は一連のものだったのでしょう。

そして永禄十二年(1569)には甲斐の武田晴信(信玄)が武蔵・相模国に侵入、小田原城を攻撃しています。この戦いは熾烈だったようで、武田軍の一部は小杉の渡しから現市内に乱入、木月、中原、溝口、登戸と稲毛などの民家、寺社を襲い狼藉を働いて去ったといわれ(小田原記、市史)、北条氏の治世が衰えたことを表しています。

元龜三年(1572)北条氏政は軍役の改定をしています。それは相次ぐ城郭の増改築に要する陣夫役と大普請役の増役でした。当時の武士は通常は田畑を耕す村の農民の棟梁ゆえ、軍役の改定は村の賦課とみてよく、時世不穩の中、領主と農民の間では厳しいやり取りがあったのではないのでしょうか。

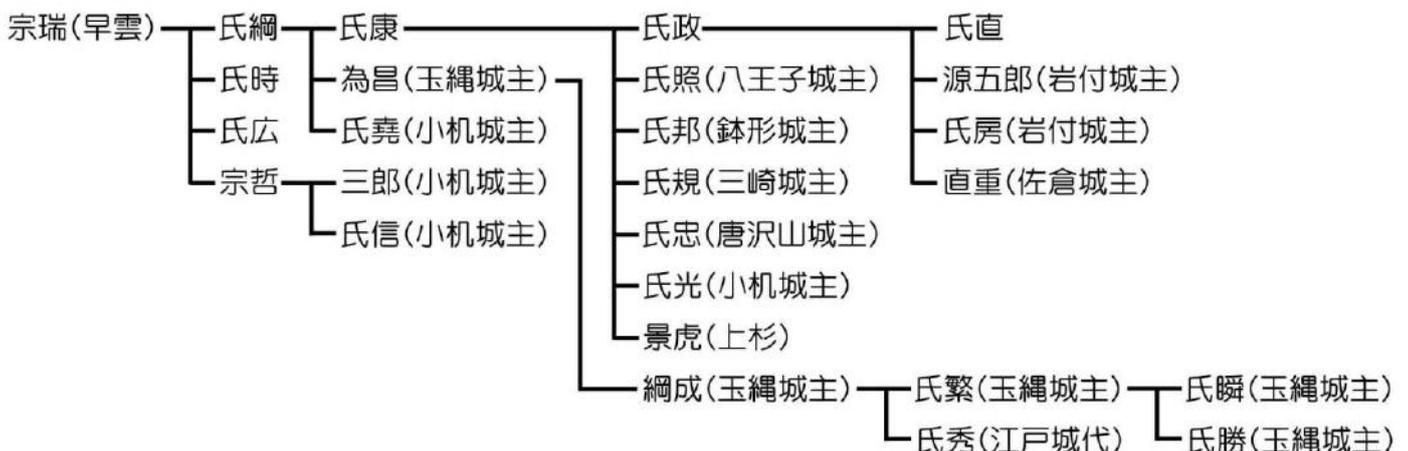
謙信、信玄が死に、織田信長が没し、豊臣秀吉の天下統一小田原城攻めは天正十七年(1589)十一月に始まっています。それより前の天正十三年、小田原城主氏直は秀吉の来攻を予想し、相模、武蔵各郷村の十五歳から七十歳の男子に年二十日間の軍事訓練を命じています。ついで、天正十五年には、虎の印判状で五ヶ条からなる規定を設け、各郷村の領主、代官に戦闘要員を出すよう割り当てを指示しますが、それはいずれも北条氏にとって成果あるものではありませんでした。

私の家には天正十八年(1590)四月、豊臣秀吉が小田原攻めの際、相模、武蔵の郷村に出された「禁制」と称する朱印状が保存されています。これは秀吉が配下の軍勢(兵士)に、「村人等に、乱暴狼藉、放火、不当行動を禁じ、違反の者は厳罰に処す」としたもので、これと同じものは、各郷村の有力地侍、寺社に出されており(市史)、秀吉勢は小田原城を囲みながら、四月の頃この地方は秀吉によって宣撫されていたことがわかります。

小田原防衛の拠点とされた小机城を主城とする都筑、橘樹の支城で戦があったという記録はありません。三輪の沢山城に米が運び込まれ、麻生の亀井城はその遺構から秀吉軍の来攻に備えての兵站基地だったとされますが確かなものではなく、ただ、王禅寺白山谷(現白山神社付近)に北条家の家臣吉垣将監重国という者が陣屋を構え、徳川家康勢と戦って討ち死にしたとの伝承もありますので多少の戦禍はこの地方も被ったものと思われる。小田原城落城は天正十八年(1590)七月最後まで抗戦した八王子城主氏輝は兄氏政とともに切腹。当主氏直(小田原城主)は岳父家康の助命で高野山に入りますが、そこには小机城主氏光(叔父=氏政弟)の姿があったようです。

北条の代、相模・武蔵の氏康・氏政の徳政も四公六民も東の間のこと、箱根湯本早雲寺の五代の墓は人に知られませんが、小田原駅前商店街の一角には、切腹した悲劇の武将、氏政・氏照の墓が町民により人知れず残されているそうです。

後北条氏略系図



参考文献:「川崎市史」「戦国大名と北条氏の文書」

(注)略系図は編集者作図挿入

第5回史跡見学バスの旅レポート 久能山東照宮周辺の史跡巡り

11月1日(火)、過去最大の43名の方の参加をいただいて、東海道の第16番目の宿場町由比、久能山東照宮そして登呂遺跡と3か所の史跡を巡ってきました。出発時には雨模様でしたが、現地に到着する頃にはあがり、快適な旅となりました。

午前中は由比の宿場で広重美術館、由比正雪の生家とされる正雪紺屋などを見学し、広重の多色刷り版画を再認識しました。

午後になると日も差すようになり、久能山へ向かう途中からの駿河湾や富士山の雄姿を堪能。久能山では家康公の時計をはじめ、徳川家の歴史をチェックし、家康公の神廟へお参り。

登呂遺跡では博物館ガイドボランティアの方から、遺跡発見のいきさつから、遺跡の概要、そして今立っている地がまさしく水田の跡であり、前方の復元住居は、まさに発掘した住居址に忠実に復元した竪穴住居であること、高床式倉庫も祭殿も同様であることを伺いました。その後博物館に戻って、出土品を見学、最後に弥生時代を体感する体験もさせていただき、皆さん見学予定時間を過ぎて、熱心に見学していました。とりわけ田下駄を履いて水田の代わりに柔らかなマットを歩く体験は、貴重な経験でした。



柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

12月 3・10・17日(毎土曜日) **2017年1月** 8・15・22・29日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (12月24・31日は休館です)

第65回 カルチャーセミナー

近代日本の教育制度 ～その変遷とねらい～

近代日本の教育制度は、大正中期にようやく形が整うまで、紆余曲折を辿ります。

その変遷を辿りながら、背景にあった明治以来の指導者たちの先見性とその狙い、結果としての功罪を考えてみます。

講師:小林基男氏 (柿生郷土史料館 専門委員)

日時:12月17日(土) 13:00～ 会場:柿生郷土史料館特別展示室

第11回 特別企画展

柿生中学校 70周年記念事業協賛特別展示 戦中・戦後の教科書を見てみよう

戦中の検定・国定教科書と戦後間もなく(昭和20年代)の小・中学校の教科書を中心に、併せて100点以上の教科書や地図帳などの副教材を展示しています。例えば戦時中の昭和18年の、中学校英語の検定教科書があります。あるいは昭和22年、柿生中学校が創設された年に、第1期生が使った科学と英語の教科書があります。23年度、創立2年目の教科書は各種揃っています。

柿生中学校の生徒文集として、今も続いている『うれ柿』の創刊号、第2号、そして10号と11号の4冊も展示中です。

期間:10月29日(土)～1月22日(日) 会場:柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。

会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。

詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。